

グループ	意見
A	<p>目標1の①として、多様な人材の活躍ということは、<u>生産性を保ったうえでニーズに合う多様な働き方が出来ることが大事</u>ではないか。例えば、リモートワークやフレックスタイムによる勤務での拘束時間の改善や、女性が働きやすい環境という意味で、さまざまなハラスメントを無くすことなど、<u>働き方改革によるワークライフバランスを実現し、若い世代も含めて、多くの人に戻って来てもらえるような働きやすい職場が増えてほしい。</u></p> <p>目標2については、目標1から繋がっていく部分もあり、多様な働き方をしている大人の姿を次の世代に見せていくことで、消防団といった地域の活動への参画にも繋がっていくのではないかと。</p> <p><u>関係人口の創出と長野ならではの暮らしと情報発信という面で、空き家、公共交通機関を活用して、例えば、公共交通であれば長野電鉄を鉄道好きの方に売り込んで長野に来てもらい、関係性を築いていくという方法や、空き家を活かすことで地域の魅力に繋げていくことができればよい。</u></p> <p>目標3については、<u>長野市の教育の特徴として信州やまほいくや高原学校などの課外活動で子供たちが豊かな経験を積むことにより生きていくための力が育まれるという部分で、東京との違いが出せるのではないかと、また、高等教育の分野でICTや芸術などの切り口に特化してみるのも、長野市としての魅力に繋がる。</u></p> <p>「まちの色」、「まちのイメージ」について、 1つ目が、<u>エリアごとに異なる魅力が活かされていること</u>。中心部では都会的な生活ができ、松代では城下町の雰囲気、西山地域では中山間地域の暮らしといった、<u>それぞれの文化や風土の違いから特徴があり、そこをブラッシュアップしていくことが重要ではないか。</u> もう1つは、先程の「多様なニーズに合った働き方」、もう1つは、「子供が沢山の経験が出来るまち」ということで、例えば東大の先生に講義をしてもらうのはインターネット経由でも可能だが、山に登るためには山まで行く必要があるといったことで、<u>経験はそこに来てからでないとできない、長野に来てもらう理由として経験が出来るコンテンツがたくさんあるところが長野の魅力、長野の良いところではないか。</u></p>
B	<p>長野市は規模が大きいため、どうやっても一つのキャッチフレーズでまとめるのは難しく、PRの仕方として、価値観を共有する人にメッセージを届けていくのが大事。いろいろな人の「こういう未来にしていきたい」という声がちゃんと出てきて、しっかりと伝わっていくようなまちづくりができれば面白い。その中で、<u>シングルマザーが住みやすいまちをつくれたら長野市はいろんな人にとっても住みやすいまちになっていくのでは</u>（「シングルマザータウン構想」）。中に住んでいる人に対して、もっと住むうえでの魅力を高めていくようなアプローチをすることで、それを外に対してアピールすることができるのではないかと。</p> <p>目標1の担い手の育成では、例えば、<u>シングルマザーの創業支援など、少しターゲットを絞ったもの、大きい声じゃなくて小さな声に絞った政策が実施できれば、それ自体がPRになっていく。</u> また、<u>テレワークを進めていくうえで、セキュリティをもっと確保していこうとか、お母さん同志が繋がれるような場づくりができればよいとか、家賃が高い駅前でも若い人が出店してチャレンジできていると、面白いまちとして訴求出来るといったアプローチが多くできればよい。</u></p> <p>目標2では、<u>移住に向けたステップとしての関係人口ではなく、まちのファンであり、まちのことに對して当事者意識を持って関わってくれる人を市外に増やしていくことが大事であり、様々な人たちが住みやすく、輝ける場所であることが、住民の愛着に繋がっていく。</u></p> <p>目標3・4では、老人ホームとシェアハウスを組み合わせたらどうか。目標4では、<u>長野は都市部に比べると災害が起きた後のリカバリーなども含めて住みやすいのではないかと、災害に対する強みをもっと発信できるのではないかと。</u></p>

グループ	意見
C	<p>産業もそれなりにあり、仕事もそれなりにある中で、<u>仕事の情報が入手しにくい、あるいは、転職がし難い</u>というものがあるので、<u>「仕事のプラットフォーム構想」ということで、仕事の情報に容易にアクセスできるネットワーク環境をつくったらどうか。</u></p> <p><u>若者に焦点を当て、若者が活躍できるような環境をつくっていくためには、1つ目は、「若者が安心して働けるような環境をつくる」、もう一つは、「若者が起業しやすいような環境を整備していく」という2つの観点が必要。</u></p> <p><u>延長の2年間はまさにチャレンジ出来る2年間であり、スタートアップの位置付けとして、「安心」と「チャレンジ」をキーワードとしてまとめられる。</u></p> <p>これからは行政が民間をいかに支えていけるのかという部分で、行政の関わり方、あり方が随分変わってくるのではないかと。</p>
D	<p>『まち』も『ひと』も<u>ちよどいい</u>というキャッチフレーズについて、「ちよどいい」という言葉が刺さるかは別として、長野市とは実際そういうものだとグループ内で納得した。ある程度田舎の部分もあり、都心型の生活もできる部分もある中で、<u>価値観が人それぞれ違う中で、自分で選んで生活できる場所、それが長野市。</u>これに関連して、世代が10歳違ってくると、求めるちよどいい生活が全く異なってくるので、情報発信やアプローチの仕方も自ずと違ってくる。</p> <p>「ちよどいい」ということでは、<u>失敗しても再起できる環境や雰囲気が必要。そういった環境があれば、目標1の②に関連して、2・3回失敗しているけれど、今は地域で輝いている魅力的な大人も出てきますし、それが若い世代が戻ってきたいと思える地域に繋がっていくのではないかと。</u>長野市では、網のような施策の中で失敗した人を救える機会はあるので、<u>周りの空気でそういった人を潰さないような社会にしていく必要がある。</u></p> <p>次世代の伝え方については、Uターンで一度県外に出て戻って来ている人は、どこかに長野に対する愛着であったり、自尊心が擽られる部分があり、戻ってきている方が多いと思われる。その中で<u>小・中学生に対しては、これまでアピールできていない素材や文化を強力に伝えていくことで、長野市の良さを自分の在り方や自尊心に繋がっていく</u>ことができれば、市外に一度転出したとしても、また戻りたいと思える長野市になるのではないかと。</p> <p><u>高校生には直接的なアプローチとして、企業や商売をしている人と直接話をする機会を増やし、働くことや長野で暮らすということを具体的にイメージできる場を多くつくる必要がある。</u></p> <p><u>子育ての世代に対しては、余暇と仕事のバランスは人それぞれであり、余暇1仕事9の人もいれば、5対5でやりたい人もいるので、「ちよどよさ」に繋がる部分で、そのバランスを選択できるのが長野市。</u></p> <p>情報発信全般して、市では<u>小学生や中学生に向けてパンフレットを配っているとのことだが、小学生はチラシをまず見ないので、アプローチをしても響いていないのではないかと。</u></p> <p>年代ごとに求めている長野市のちよどいい暮らしは異なり、世代ごとに刺さるアピールの仕方も違うので、ある年代をピックアップして<u>アプローチの仕方を細分化してもよいのではないかと。</u></p>